

議長	副議長	局長	次長	議事係長	議事係

<b>学校適正配置等調査特別委員会会議録</b>			
日 時	平成14年5月30日(木)	開 議	午後 1時00分
		散 会	午後 3時08分
場 所	第2委員会室		
議 題	継続審査案件		
出席委員	久末委員長、渡部副委員長、横田・前田・松本(光)・中村・大畠 ・新谷・高階・斉藤(陽)・佐野 各委員 (新野委員欠席)		
説 明 員	市長、助役、教育長、総務・企画・財政・学校教育・社会教育各部 長ほか関係理事者		
<p>別紙のとおり、会議の概要を記録する。</p> <p>委員長</p> <p>署名員</p> <p>署名員</p> <p style="text-align: right;">書 記</p>			

(人事異動に伴い、理事者紹介)

委員長

ただいまから委員会を開きます。本日の会議録署名員に、新谷委員、斉藤陽一良委員をご指名いたします。継続審査案件を議題といたします。この際、理事者から報告の申出がありますので、これを許します。

「中学校適正配置に関する実態調査について」及び「平成14年度児童・生徒数一覧について」。

(学教)京谷主幹

3月に実施しました中学校適正配置に関するアンケート調査の集計結果について、ご報告申し上げます。

資料1、「中学校適正配置に関する実態調査について」をご覧くださいと思います。調査の目的ですが、中学校適正配置実施後の、該当中学校における実態を把握するため実施したものであります。

調査対象といたしましては、対象校の石山、東山、住吉中学校の第3学年、受入校の末広、西陵、菁園、潮見台中学校の第2学年、対象校及び受入校の校長及び教職員であります。

調査方法は、無記名アンケート調査であります。実施時期は、対象校が平成14年3月7日から3月14日の間、受入校は平成14年3月15日から3月20日の間に実施いたしました。

調査の回収状況は、校長及び教職員は対象校で31名中20名、率にして65パーセント、受入校では76名中45名、率にして59パーセント、対象校、受入校合計107名中65名で61パーセントの回答率でございます。生徒については、対象校が173名中146名、率にして84パーセント、受入校の転入生が105名中95名、率にして90パーセント、在校生が252名中233名、率にして92パーセント、転入生、在校生合計357名中328名で92パーセントの回答率でございます。

なお、教職員の回答率につきましては、調査時期が年度末の3月であったことから、生徒の進路関係、卒業式、修業式関係業務、対象校における閉校式の準備等の業務が重なったことなどが、主な理由と思われま

す。次に、2ページの対象校における調査結果のまとめについてであります。生徒につきましては、当初、第3学年のみの学校生活には、多少戸惑いもあったようですが、時間が経過するにつれて、これまでの落ちつきを取り戻し、最終学年としての自覚を持ち、意欲的に授業や学校行事等に取り組んでいたとのこと

です。また、下級生はいませんが、楽しく伸び伸びと生活できたこと、教職員と気軽にコミュニケーションができたこと、友達や教職員との交流も広がり、相互に協力し生活する機会が増えたことなどを挙げております。

その中で、大部分の生徒は、3年間学び生活した学校で卒業できることに対して、「入学したときの友達と、一緒に卒業できてよかった。」「今までの学校で、気遣いせず気軽に過ごせた。」「残っている友達を、大切にすることを学んだ。」など、その利点を挙げておりますが、「下級生もいなく、寂しかった。」という生徒も数名おりました。

教職員の調査ですが、生徒指導に対する教職員の反応は、学習、生活面において生徒一人一人に目が行き届き、きめ細かな指導ができたとしています。

また、行事等において、教職員、生徒、保護者が一体となって取り組み、今まで以上に連帯感が生まれ、楽しくできたことや、積極性、活気が感じられた反面、生徒の減少で部活動が成立しなかったことを挙げております。

さらに、教職員の校務負担について、教頭未配置の学校においては、閉校にかかわる業務や、残務整理等により負担過剰になったとしていますが、教材研究、研修時間、学習指導、生徒理解等、「しやすくなった。」「容易になった。」「変わらない。」との回答も多く、教職員の努力によって、教育活動に大きな支障はなかったものと思われ

ます。以上のアンケート結果、対象校については、在校生が第3学年のみという特殊な状況にあったことから、現実をしっかりと認識し、生徒、教職員及び保護者が一丸となって、3学年ゆえに生じる様々な問題を克服したようであり

ます。また、高等学校への進学においても、全日制公立高等学校の合格者が、前年度と比較して増加するなど、

中学校最後の生活を充実させ、楽しく有意義に過ごしたものと思われま

す。次に、3ページの受入校の調査結果のまとめについてですが、生徒につきましては、当初、転入生、在校生とも一抹の不安もあったようですが、次第に学校やクラスの雰囲気も平常に戻り、新しい友達の増加や教職員、仲間との交流により、全体が明るく、授業も楽しくなったと感じていた反面、生徒が増えて、一部、騒がしくなったと感じている生徒も数名おりました。

学習意欲については、よい意味でのライバル意識が生まれ、一人一人にやる気、意欲が徐々に高まったとしておりますが、一方、ライバルが増えたことや、該当校のレベルが高いとの理由もあって、少数ではございますけれども、意欲が低下したという生徒もおりました。

通学路の状況については、転校生の大半は「変わらない」としておりますが、数名の生徒は学校までの距離が遠くなったこと、交通量、横断歩道の横断回数が増えたことに不安を感じていたようであります。

学校教育については、様々な活動を通していろいろな仲間と交流ができたことや、人数の増加により活気が出て、充実したと感じている生徒が数多くいました。また、部活動についても、部員増になって廃部を免れたり、新しい部が創設されたことにより、意欲が向上し成績もアップするなど活気が見られたようであります。

教職員から見た生徒全体の様子は、生徒数、学級数の増加に伴い相互に刺激し合う姿が見られ、様々な面で学校全体に活気が感じられたとしております。生徒の学習意欲については、生徒自身の努力と、相互の切磋琢磨により高まったとしております。しかし、対象校における評価方法なども考慮に入れながら、生徒の学習意欲を高めるための時間がかかったものと思われま

す。教職員の校務負担については、「職員が増えて、担当教科が減った。」という利点が挙げられますが、一方、「きめ細かな生徒理解が、難しくなった。」との回答もありました。いずれにせよ、生徒指導補助教員の配置等の効果も見られ、大きな問題は生じておりません。教材研究、研修時間及び学習指導については、そのほとんどが「今までと変わらない。」と感じておりますが、「個別指導がやりにくくなった。」とする教員も少数おりました。

以上のアンケート結果から、受入校については、生徒数、学級数が増えたことに伴い、生活や学習面で、多くの友達との出会いによる生徒相互の刺激により、切磋琢磨する雰囲気が醸成され、学校全体に活力を与えるなど、大きな成果があったものと思われま

す。次に、4ページの調査結果に対する市教委の考えであります。小樽市中学校適正配置は、生徒数の減少に伴い学級数の確保や、教育条件のさらなる向上を大きな目的として、生徒の思いはもとより、保護者、教職員、市民など、多数の関係者の理解と協力を得ながら実施したものであります。

実施に当たり、受入体制、生徒指導の問題など、様々な指摘もありましたが、市教委としても、保護者等の意見を聞きながらその実態を把握し、円滑に適正配置が進められるよう努めてまいりました。

今回のアンケート調査から、適正配置を実施したことにより、受入校の生徒数、学級数、教職員数が増えたことは、広い意味で生徒や教職員に刺激を与え、各教科や学校行事、部活動等に活気をもたらし、学校生活全体の向上に大きな成果があったものと思われま

す。一方、該当校の第3学年の高校入試に影響があるのでは、という生徒、保護者の心配も、結果として、全日制公立高等学校の合格者が増加することにより、解消されたものと思われま

す。今後、市教委としては、受け入れられた中学校において、生徒、保護者のニーズに応える学習指導、生徒指導のさらなる充実を期待するとともに、地域に開かれた学校づくりに向けて、その環境づくりに支援、努力してまいりたいと考えております。

次に、5ページから10ページにつきましては、アンケート調査の集計数でございます。

5、6ページは、対象校の石山、東山、住吉中学校の教職員の調査でございます。7ページは、対象校3校の第3学年の生徒の調査集計であります。8、9ページについては、受入校の末広、西陵、菁園、潮見台中学校の教職

員の調査集計であります。最後の10ページについては、受入校4校の転入生、在校生の調査集計となっています。

以上、中学校適正配置に関する実態調査について、ご報告申し上げます。

続きまして資料2でございます。平成14年5月1日現在の児童・生徒数、学級数、教職員数と、小学校の新1年生の入学推計の一覧表でございます。

ちなみに13年度の表は載っていませんが、平成13年度との比較では、児童数が小学校で153名、中学校で233名、計386名の減となっております。また、新1年生の入学推計表から、14年度は24学校中19校、約7割の学校が1学級ということになります。

一方、入学児童数においても、年度によっては1桁の学校も何校か出てまいります。今後、平成14年度と比べまして平成15、16年度には数名増えるものの、17年度から減少するというので、18年度には、14年度と比べまして新1年生だけで76名の減となります。市内全体では440名の児童数の減が想定されます。

#### 委員長

次に、教育委員会の移転先について。

#### (学教) 総務課長

教育委員会の移転先につきまして、お手元の資料3に基づき説明申し上げます。この平面図は、旧東山中学校を教育委員会庁舎として使用する図面であります。

まず、事務室としまして、1階部分の主なものは社会教育部社会教育課、それと書庫でございます。次に、2階部分でございますが、主なものは、教育委員室、教育長室、適応指導教室、教育研究所及び学校教育部の各課が配置されております。

次に、教育関係団体等への開放スペースとして考えられている部分ですが、1階の大会議室と小会議室です。3階部分でございますが、資料館室を除く全室を予定しております。

#### 委員長

これより質疑に入ります。順序は、共産党、自民党、市民クラブ、公明党、民主党・市民連合の順序といたします。初めに、共産党。

#### 新谷委員

#### 中学校適正配置実態調査について

実態調査のアンケートからお聞きします。

アンケート自体は、まだまだ十分とは言えず、不十分なところがたくさんあると思いますけれども、この中から、幾つか読み取れるところがあると私は思いました。

この適配に当たって、当初、小規模校の課題として、成績が偏りやすく学習意欲や表現力に欠けることが多いという点が挙げられておりました。けれども、このアンケートから、対象校と受入校を比較しますと、先生と生徒の間では若干差があります。

まず第一に、対象校と受入校の生徒を比べた場合、対象校では、学習意欲が「高まった」が32パーセントです。しかし、受入校の転校生は、「高まった」が24パーセント、在校生はさらに低く、19パーセントになっています。それから、生徒の自主性を見ますと、教職員から見て対象校では「高まった」が40パーセントで、受入校では「高まった」が13パーセントと、逆に「低下した」というものも、わずかですけれどもあります。

こういう結果から見ますと、廃校された3校では、先生方も父母も、一丸になって頑張ったということもありませんけれども、一番肝心な生徒も、学習意欲や自主性が高まったということがわかったと思うのです。

これは、3学年という特殊な事情もありますけれども、小規模校の課題とされていたものが、やり方によってはクリアできる、そういうことを表していると思いますが、いかがですか。

#### (学教) 京谷主幹

ご指摘のとおり、受入校と対象校を比較した場合には、そういった数値が出てきております。

確かに、特殊な状況に置かれた中で、今、委員のご指摘にございましたように、教師、保護者、生徒が一体となって取り組んだということも挙げられましようけれども、全体としてそういった結果が出ました。

また、受入校は、確かに高い数値を示してはございませんけれども、活気が出て、いろいろな取組も図れて、学習意欲が高まったということもございます。そういった意味では、双方とも、ある意味での結果が出ているのではないか、こういうふうに考えております。

**新谷委員**

教師の方ですけれども、このアンケート表で、対象校では、教材研究、本来の研修時間、学習指導、生徒理解等も容易になったと答えています。

けれども、受入校では、反対に難しくなったという回答が多いです。このことから、小規模、少人数は、教師がゆとりを持って、行き届いた教育ができると言えるのではないかと思うのですが、その点はいかがですか。

**(学教)京谷主幹**

確かに、おっしゃる意味では生徒が少ない分、目が行き届くという状況下にあったと思います。

また、受入校につきましては、生徒が増えた分、目が行き届かなかったという現象が起きていることは事実でございます。

ただ、そういった面で、私どもとしては、小規模校イコール対象校という受け止め方はしていませんで、そういった意味では、今回の適正配置の中で良い面と悪い面が出たのでしょうか、そういった押さえをしています。

**新谷委員**

けれども、結果としてこういう数字がここに表れているわけですから、そのところは、しっかりとする必要があると思うのです。

それから、今も言いましたけれども、対象校では保護者が一丸となって頑張りました。

それで、公立高校の合格者も、結果として前年度より多かったわけで、非常に良かったと思っております。

しかし、生徒自身がどう感じているかということを見ると、対象校の生徒では、学校行事が楽しかったが62パーセントですけれども、逆に、転校生は、半分の31パーセントしか楽しかったと答えておりません。

これも、3学年という特殊な事情があったとしても、小さいところだからこそ保護者などが一体となって、また、先生たちも一体となって楽しくできるのだということを実証したと思うのですけれども、いかがですか。

**(学教)京谷主幹**

そういった意味では、条件的にハンディというのですが、3学年しかいないという中での生徒の頑張り、あるいは保護者の頑張り、先生の頑張りというものが、そういった好結果につながったという受け止め方はしています。

**新谷委員**

小さい学校で、学校、生徒、保護者が一体となってやっているところは、ここだけではなくて他にもあります。

そういったところでは、子供たちは楽しい学校だと感じているところが多いですね。

それから、このアンケートで、転校生のことが非常に気になるわけです。先生と友達との交流について、「少なくなった」というのが12パーセント、文化祭、体育大会がつまらなかったという生徒ですが、さっきは「楽しかった」が31パーセントで、「つまらなかった」が36パーセントもあります。

こうした体育大会などの学校行事は、本来であれば、クラスのみながまとまって楽しくなるはずなのです。

ところが、こういうふうに回答したということは、まだ、なじめていない、前の学校の方がよかったと言っているのではないですか。

**(学教)京谷主幹**

確かに、部活もそうですけれども、特にそういった学校行事の中では、行ってすぐになじめない部分が出たのか

など。それが、結果として、3分の1づつくらいの回答になったのかなという感じは受けています。

**新谷委員**

それから、先ほど市民クラブから資料要求がありまして、受入校の先生方は回答が平均して59パーセントですけども、A校では、たった5人しか回答されておりません。29パーセントです。こういうことから顧みて、子供たちも先生方も、非常に苦労したのではないかと思います。何故、こんな低い回答率になったのですか。

**(学教)京谷主幹**

いろいろな理由はあったと思われます。ただ、私どもが感じることは、この調査時期が3月であったので、生徒の進路関係、あるいは卒業式、修業式、対象校におきましては閉校式、という業務が重なったのかなと、そういうことが主な理由かと考えています。

**新谷委員**

でも、閉校式は対象校で受入校ではありませんね。受入校でこれだけ低いということは、先生方は、本当は適切なやり方に、暗に賛成していなかったのではないかという気がするのです。

**(学教)京谷主幹**

回答していただけなかった先生方のことをございますけれども、単に、反対だから回答しなかったのかというご指摘でございますが、少なくとも、私どもはそうは受け取ってなくて、多忙という言葉がいいのかわかりませんが、あまり適切な時期ではなかったのかなと、反省はしてございます。

**新谷委員**

それから、いじめなのですが、教職員から見て「ない」という回答が84パーセントで、「ある」が4パーセントですね。子供、生徒がどう感じるかということが一番大事だと思うのですけれども、よく、これまでいじめに遭った話を聞くと、先生が、全然わかってくれなかったとか、そういうことも聞きますね。

ですから、子供自身が、どう感じるかということを見るのが大事だと思うのです。しかし、子供、生徒の方には、いじめを受けているかとか、逆の場合もあるけれども、そういう項目がないです。どうして省いたのですか。

**(学教)京谷主幹**

一つには、アンケートといえども、児童・生徒に直接問い合わせた場合に、いじめた、いじめられたという回答が得られるかどうかということもありまして、それよりも、校長なり教師から見て、実態がどうだったかということの方を、今回は取り上げました。

**新谷委員**

この計画を始める前に、父母の方からも、不登校、いじめは非常に心配されていましたね。

それで、不登校はアンケートに載っていますけれども、いじめられているというのは、なかなか言いづらい部分があるのです。それは確かにわかりますけれども、こういうふうに、無記名のアンケートをとることによって、自分のことを訴えることもできるのではないですか。

最初にそういうことを心配していたのですから、それがあるかを見ていくことが、大事だと思うのですよ。

ですから、今後とも、この調査はこれで終わるとは思いませんけれども、そういうところも入れた方がいいのではないかと思います。いかがですか。

**(学教)京谷主幹**

アンケートの中では、最後に、感じたこととか、何かあったらということでの設問がございます。

そういった文章による部分につきまして精査をしましたが、特にその中では、いじめられた、いじめたということはないでしょうけれども、いじめられたという回答はなかった、というのも事実でございます。

しかしながら、今のご指摘のとおり、今後、そういった面で、もしまた検証するのであれば、そのような対応も考えていきたいなと考えてございます。

**新谷委員**

それから、転校生は通学路に不安なところがあるというのが、25パーセントと意外と多かったんですね。特別に認めた部分もありますけれども、通学路については、無理があったのではないかと思います。

**(学教)京谷主幹**

通学路の状況についてアンケートをいたしましたら、転校生でございますけれども、大半は「変わらない」といった回答が出ていました。

しかしながら、不安なところもあるというので、主な理由といたしましては、交通量、横断回数が増えた、あるいは、遠くなったということを挙げていまして、そういった面につきましては、当然、今までの学校より距離が遠くなった生徒もあるわけですから、そういった生徒は、今まで通っていた通学状況が変化したことによって、そういうふうに感じたのではないかなと思います。

**新谷委員**

不安と感じたところは、きちっと対策を立てた方がいいと思います。

前は、末広の中学校ですね。あそこの町内会に協力してもらって電気をつけた、街灯をつけたということがあります。そういう手だても必要だと思うのですが、いかがですか。

**(学教)京谷主幹**

このアンケート調査結果につきまして、通学路のみならず不安なところがある、改善すべき点があるとなれば、やはり、それらの対応について、今後、十分に検討していかなければならない。また、教育委員会だけではできない部分については、関係部局とよく協議しながら対応してまいりたいと考えております。

**新谷委員**

その点は、是非、よろしくお願ひしたいと思います。

それから、3ページの調査結果のまとめですが、「このアンケートの結果から、非常に大きな成果があったものと思う。」と書いてあるのですが、前や後のアンケート結果を見ても、どうも大きな成果があったとは思えないのです。むしろ、課題の方が、いっぱいあるのではないかと思います。

さっき言ったように、先生方は子供の理解をしにくくなったとか、なかなか指導をできないとか、生徒の方は学習意欲が低下したとか、そういうようなこともあって、決して大きな成果があったと思われたいのです。この評価には、無理があるのではないのでしょうか。

**(学教)京谷主幹**

確かに、ご指摘のとおり大きな成果があったのかと。

しかし、アンケート集計結果から、今言ったように、改善すべき指摘の部分もございまして、大きな成果があったかご指摘されると、私どもとしては、適正配置に関するアンケートに見られた結果は、こういったある程度の成果をもたらしたという気持ちで書きました。

**新谷委員**

子供は環境に順応するものだと思うのです。

けれども、学校に慣れたと言いながらも、いろいろな問題点があるわけですから、適配を始めて無理に成果を強調しているような気がしてならないのです。ならないというよりも、実際に、これにいろいろなことが表れているわけですから、こんな問題点にね。

ですから、この点は、今、大きな成果というふうに言えないと思うのですよ。この調査結果は、今後、どういふふうにしていくのですか。これで終わりではないですね。

**(学教)京谷主幹**

今後、これらのアンケート調査結果での改善点を踏まえながら、少なくとも、受入校における現在の第3学年の

生徒が卒業するまでの間は、やはり、見極めながら対応してまいりたいと考えております。

**新谷委員**

それから、この適配の結果、さまざまな問題があるということが浮彫りになりましたが、対象校は3学年で、これですべてを判断することにはならないけれども、小さいからこそ、先生、父母、生徒が一丸となって、いろいろできたという部分もあったのだとおっしゃいましたね。

小規模、少人数がよいということがわかったと思うのですけれども、小学校もこういう感じで、やっぱり小さいところはなくするというのはのですか。

**(学教)京谷主幹**

小学校につきましては、今、部内で、資料などに基づきまして、まさしく検討中でございます。

ただ、先ほど資料でお示したように、市内全体の生徒・児童数は、これからどんどん減少していくような傾向にあります。

なおかつ、半学級と申しましょうか、1学級編制しかできないというような学校も増えてまいりますので、その辺も十分に分析をしながら、次の小学校の計画と申しましょうか、検討に入ってまいりたいなと、こういうふうに考えております。

**教育長**

今のお答えに、ちょっと補足をいたしたいと思います。

一つは、アンケート結果を今後どうするのかということですが、対象校の第3学年は、卒業時点にアンケートを実施したのは、その時期しか設定できる時間がなかったということです。本来、受入校については、在学中の10月か11月にやれば、「今後の課題は」という聞き方もできたのですが、それができなかつた。

しかし、対象校で卒業してしまいましたので、受入校は、今後、今回3年になる中学生については10月ころに調査をしまして、学校の課題、あるいは教職員としての課題などもお聞きしたい。さらに、3月時点で修了時点の調査もいたしたい、これが第1点です。

第2点で、小学校の場合ですが、前回、小学校のスケジュールを聞かれたときに、この年度は実態についての資料を収集して準備をするということで、まだ実際の検討は進めておりません。そのようにお答えしていますので、今回、5月1日現在の数字と推計を示したものです。これについての分析は、一切いたしておりません。

**新谷委員**

それでは、再度お聞きしますけれども、小学校については、まだ検討もしていない、考えていないということではよろしいですか。

**教育長**

準備は進めておりますけれども、具体的な実施内容の策定には至っておりません。

**新谷委員**

そうすると、15年度はどうなるのですか。来年は。

**教育長**

非常にお答えしづらい質問なのですけれども、15年度は選挙もございまして、一つの判断の基準ができると思いますので、近くなってどうするかを判断いたしたい、そう考えております。

**新谷委員**

それでは、次に移る前に、やはり、一言言いたいと思います。

今回の適配で、子供たちには、いい面があったかもしれないけれども、つらい面もあったし、楽しくなかったこともあったのですから、小学校の場合は、もっと大変だと思うのです。

そのことを、やっぱりちゃんと受けとめていただきたいと思います。私たちはもちろん反対します。これには反



対ですけれども、今度は、しっかりやっていただきたいと思います。

**教育委員会の移転について**

東山中学校の跡利用なのですけれども、市教委が東山に移って市民が一番困ることは、転入学の時期だと思うのです。東山まで行かなければならないというのは、本当に大変だと思うのです。

この時期は、どういう方法をとって対処されるのか、お伺いします。

**(学教)学務課長**

ご指摘のとおり、現状は、本庁の戸籍住民課の窓口で転入手続をした後、離れておりますけれども、教育委員会に来ていただいて転入学手続をする、そういった流れになると思います。

逆に、サービスセンターで転入手続をした方は、同じように、教育委員会に来てもらうことになっています。

実は、市民部を中心にですが、ワンストップ行政の推進ということで、転入手続につきましても、それぞれ3サービスセンターで何とかやれる方法がないのか、ということで検討してきた経過がございます。

ただ今回、教育委員会の庁舎そのものが本庁から離れたところに移るということで、本庁の戸籍住民課窓口と教育委員会の間も含めて、ワンストップできないかということでの検討に入っております。

**新谷委員**

本庁の場合は、戸籍住民課で対応するということですね。けれども、春先は非常に込んで、大変な場合には、職員が大きな声を上げなければならないほどです。

そういうところで受付というのは非常に大変だし、手続に行った人が大変な思いををすると思うのです。その時期は、教育委員会の学務課から窓口に1人来るとか、そういうことは考えていないのですか。

**(学教)学務課長**

ご指摘のとおり、転入学手続というのは年間250件ほどございますけれども、その4割近くが、3月末から4月にかけて集中するのは事実です。

手続につきましては、現在、市民部と協議している内容も、平時といいますか、普通の月は10件程度の数ですけれども、3、4月は今申し上げたような数字でありますので、市民部との調整は、そこが中心になるというふうに思っております。

ただ、学務課職員の派遣ということについては、正直に申しまして、転入学事務だけではなくて、教育委員会ではどうしても3月末、4月というのは、業務的にピークを迎えるということもありますので、一つの検討課題としてはそれもあつ、ということでご理解いただきたいと思います。

**新谷委員**

特認ですが、その場合は、非常に時間がかかると思うのです。その場合の対応は、窓口でできますか。

**(学教)学務課長**

特認の関係につきましては、ここに住んだからこの学校、ということではない形での相談になります。

年間で150件前後ございますけれども、内容的には、教育相談的な要素にもかかわる部分が結構ございますので、特認のそういった手続は、内容からして、現状ではやはり教育委員会で行わざるを得ないだろう、というふうに思っております。

**新谷委員**

年間150件で、3、4月というのはどのぐらいあるのですか。

**(学教)学務課長**

特認の手続というのは、市民課の窓口と直接リンクする仕事ではありませんので、直接、教育委員会に来てもらうということなんです。どこかに行ってから、また来るということではありません。

それから、特認の関係ですと、学校指定するのは主に1月の末くらいになります。ですから、特認のご相談をで

きる時期としては、1月下旬から2月上旬にかけてがピークになります。

**新谷委員**

そうすると、そういう場合は、直接、市民が東山に行くということですね。月平均したら、そんなに多くないかもしれませんが、行くのが大変ではないかと思うのです。

それで、学務課は本庁に残って、あまり市民が来ない5階の部局、そういうところに行く、というふう考えた方がいいのではないですか。その方が、ずっと市民サービスになると思うのですが、いかがですか。

**(学教)学務課長**

私が答えていいのかわかりませんが、おっしゃるとおり、転校事務、特認の関係とかもございませけれども、学務課の仕事としては、就学指導とかもございまして、それは、指導室、総務課とも連携をとりながら進めなければなりませんので、学務課だけが本庁に入るというのは、なかなか難しいと思っております。

**教育長**

教育委員会の本体が東山中学校に移るということで、市のお知らせ板でもそのようにご紹介します。学務課では、今、課長が話した以外にも、奨学生の事務、教科書の事務等がございませるので、移転については、かなり難しいと考えます。

**新谷委員**

教育長は、そうお答えしませけれども、それであれば、なおさらここが窓口になって、ここにいれば本当に市民が来やすく活動しやすい、となるのではないかなと思います。

難しいとは言っておりますけれども、様子を見て、検討課題にしたらいというふうに思います。

**適応指導教室について**

それから適応指導教室なのですけれども、これは、今より広くなるのですね。

**(学教)総務課長**

現在の面積よりは、実際の面積的には少なくなりますが、有効面積で見ますと相当に広くなります。

**新谷委員**

それはよかったですと思います。前の適応指導教室が、非常に狭いと言っていましたのでね。

それから、3階のコンピュータ室、図書室の一般開放のことです。これは、もちろん一般の方に開放するのはいいと思うのですけれども、やっぱり子供優先で、適応指導教室の子供たちが、有効的に活用できるように考えていただきたいと思うのですが、いかがですか。

**(学教)総務課長**

ただいまお話がありました適応指導教室の子供が、コンピュータ室などを使うということで、事前に適応指導教室の担当から申出があれば、また、他の教育関係団体などの使用がバッティングしていなければ、なるべく有効に使っていききたい、このように考えます。

**新谷委員**

ぜひ、そういうふうをお願いしたいと思います。

**住吉、石山中学校の跡利用について**

住吉、石山の跡利用なのですけれども、進捗状況はいかがですか。

**(企画)川堰主幹**

石山、住吉両中学校の跡利用についてでありますけれども、ご承知のとおり、石山につきましては昭和学園から、住吉中学校につきましては双葉高校から、それぞれ貸与、及び譲渡の要望が提出されております。

この跡利用につきましては、4月以降も二度にわたって関係部局から成る跡利用検討委員会を開催し、議論しているところですが、最終的な結論を出すまでには至っておりませぬ。

しかしながら、跡利用を希望する相手方がありますことから、できるだけ早い時期に結論をお示ししたいというふうには考えております。

**新谷委員**

今、病院の新築問題が出ていますけれども、こういふことで、例えば住吉中学校に量徳小学校が行って、その跡に病院とか、そんなような計画があるのですか、企画部の方で。

**(企画)川堰主幹**

住吉中学校につきましては、地理的優位性で有効利用ができる場所ですので、いろいろな角度から検討しているということで、結論までには、もう少し時間を貸してもらいたいと思っております。

**新谷委員**

市長もそういうふうにお考えなのですか、住吉中学校の跡利用について。

**市長**

病院の改築場所については、市長への手紙等によりますと、現地改築してほしいという声もあるのです。そういったことも含めて、どれぐらいの費用がかかるのかということもあり、トータルで考えていかなければならない問題だろうと思います。

一方、量徳小学校というのは、教育の発祥の地といった位置付けもありまして、簡単ではない話でございますので、慎重に検討しているという状況です。

-----  
**高階委員**

**中学校適正配置実態調査について**

一つは、報告にあったアンケートのかかわりで最初にお尋ねします。

広報おたる4月号に、中学校3校の閉校のことが記事に載っているのですけれども、何て書いてありますか。何のために、三つの学校をなくするのだと書いてあるのですか。

**(学教)京谷主幹**

広報に載っていた記事は私も確かに見ましたけれども、3校廃止という形になりましたので、そういった中で、終えた段階での状況を広報に載せたということでもあります。

**高階委員**

こういうふう書いてあるのですよ。生徒の数が少なくなってきたという次に、活力に満ちた学校、活力あふれる教育活動実現のための中学校の適正配置と。先ほど、アンケート調査の説明、報告がありました。おおむね成果があったと。

全体的に言えば、市教委はそういうふう押さえているのですけれども、活力に満ちた学校、活力あふれる教育活動、こういうことの実現のためだと書いてあるのですから、アンケート結果から見て、もう少し、そういう点ではどうだったのかということをお尋ねします。

**(学教)京谷主幹**

確かにご指摘のとおり、このアンケートが全部これでいいということではなくて、内容そのものが不十分であったと、その感否めないところでございます。

今後におきましては、ご指摘のあったように、もう少し掘り下げた検証の仕方、そういった検討も必要なのかなと感じてはおります。

**高階委員**

教員に対して、対象校を受け入れる生徒に対してのと同じアンケートです。私は、現実にアンケート用紙を見ておりませんのでお尋ねするのですけれども、同じような質問項目で、先生にも生徒にも同じようなアンケート用紙

で回答を求めた、こういうふう理解していいのだろうか。

(学教)京谷主幹

教職員に対しましては、対象校も受入校も同じような設問でございます。

生徒に対しましては、受入校は3年生しか残らなかったり、2学年におきましては、受入れ側の在校生、転入する側の転入生というものがあまして、共通する部分もありましたけれども、あえて、それぞれに分けて調査を実施いたしました。

高階委員

生徒の場合、それから教師の場合、ましてや校長先生の場合というのは、それぞれ立場が違うので、×か知りませんが、漠然とした同じようなアンケートをとるといのは、少しラフではないかと感じます。

先ほどの質問にもありましたけれども、特に、生徒は全員が回答していない。ましてや、先生の方も回答率が低い。こういうことは、我々が見て何だったのかなと思うのですが、それは、どう見たらいいのですか。

(学教)京谷主幹

今回の調査は任意と申しませうか、全員が提出してくださいという形での調査ではなかったということが挙げられまして、それが大きな理由になるかならないかは別に、先ほど申しましたように、調査時期が多忙期といいますが、繁忙期と申しませうか、そういった時期に重なったということが実態でございます。

そういったようなことで回答率が低かったのかなと、私どもはそのような押さえをさせていただきます。

教育長

先ほどちょっと触れましたが、アンケート実施時期が3月中旬を挟んでということで、若干の意識の違いが出たのではないかなと。

まず、アンケートが終わってから教頭や一般の先生にもお聞きしたのですが、教師には全体的に安堵感がございました。高校入試が終わって発表が目前であるということで、自分たちの指導に間違いがなかったということもありません。

受入校でも大きな生徒指導上の問題はなくて、学年進行の問題だけが課題という時期、そして3学期特有の繁忙時期であったのでパーセントも下がったと。

受入校の3年生については、卒業直前のアンケートを持ちたいと思いますが、さきにお答えしたように、2学期半ばで学校での当面の課題意識はどうか、という点を中心にアンケートを構成してみたい。

そのときには、今までも校長会とか関係者に相談したのですが、今度は教育研究所も一緒になりますし、具体的なアンケートづくりに加わってもらおうかなと、そういうふうにも今考えております。

高階委員

回答率が低いというのは、そういう時期にぶつかったということなのですから、生徒でないのですから、教育の専門家なのです。

小樽市の教育の歴史の中で、半世紀も続いた学校が三つもなくなるのですよ。そういう重大な問題なのですから、先生方も将来を見通され、今までのことも振り返りながら真剣に答えていただきたかった。そういう現場の生の声が、こういう問題を取り組む上で大いに参考になるのではないかと、という気がしてなりません。

それから項目も、「よかった、変わらない、悪かった」とか、そういう単純な選択肢ではなくて、指導主事の皆さんがおられますし、教育研究所もありますから、専門の立場で、子供たちの学力は一体どうだったのかということやら、アンケートに限らず、先ほど進学の話もありましたけれども、全体の進路指導の面でこのことはどうだったのかとか、また、生徒指導上はどうだったのか、学校行事というのは指導要領でも大事な項目としてあるわけですから、こういうものを行う上でどうだったのかということなど、専門的な立場からも検証する必要があるのではないかと、こういうふう思います。

失礼な言い方ですけれども、主観的なアンケートのとり方で、これをもって実態がよくわかったということにはならないのではないかと。もっと専門的な分野から先ほどの話を聞いておられますと、これで終わったわけではない、検証はまだ続くと言われておりますから、そういう観点からも詰めた検証をして、これを将来に生かしてもらいたい、こういうふうに思います。

小学校のことについては先ほど答弁がありましたので、そういう受け止め方をしたいと思います。

#### 学校週5日制及び新学習指導要領について

この特別委員会には直接はなじまないかなと思うのですが、私が大変関心を持っているのは、この4月からスタートした学校5日制、新学習指導要領です。

全国的に、毎日、新聞に出ているというわけではないですが、専門家も含めて、5日制という問題は学力の低下のことも含めて大論議になっているのですね。文部科学省も、2001年に言ったことと2002年に言ったことでは、手のひらを返したと言うとオーバーですけれども、今度は何か違ったようなことを言い出してきているのですね。

そんなふうに大もとが揺れているわけですから、市町村においての教育というものは、現場では大変でないかなと思うのです。

そういうふうに、スタートしたばかりではありますけれども、学校現場でこんなことが問題として今起こっているということで、いずれは調べられると思いますが、今時点で何か押さえているとか、問題だと思われるような部分はないのですか。

#### 教育長

委員の前半の質問について、ちょっと補足させていただきます。

設問の構成の仕方については、工夫しなければいけないと思います。受入校4校の中で、例えば、菁園中学は非常に環境が変わってきて、今回、校舎の解体なども含められますので、他の3校とは変わった実態があります。ですから、いわゆる各校共通の設問でいいのかという問題もありますので、設問の工夫をしたいと思います。

それから、パーセントが少なかったというご指摘が委員会で幾つかございました。実は、内部で検討している際にもそのことの言及があって、担当者に、なぜ催促しなかったのかという厳しい叱声もございました。

今後の実施時には、提出の時期とその集まり具合を見て学校にお願いして、きちんとした結果を見たいので、というお願いをする工夫もしなければいけない、そんなふうにも考えております。

#### (学教)指導室長

学校完全週5日制の状況についてですが、各学校から年度始めに教育課程の1年間の計画が提出されています。

その中では、本格的な実施ということで、例えば、総合的な学習の時間ですとか、中学校では選択教科の部分で、各学校が創意工夫を凝らした取組を計画しております。

それから、各校長からは、教科指導におきまして、基礎・基本の徹底ということで、確実に身につけられるように取組を進めたい、というお話もございまして、各学校が、学校完全週5日制のねらいに沿った創意工夫をされて、今後、計画されて進められていく、このように思います。

また、総合的な学習の時間については、前回の委員会の中でも申し上げたとおり、教科書はございません。それぞれの学校で、子供の実態、地域の実態に合わせた取組が計画されておりますが、各学校が苦労しながら計画を立てているな、というところが見受けられます。

#### 高階委員

スタートしたばかりですから、これからいろいろな問題が起こってくると思います。

この委員会には合わないかもしれませんが、また論議をさせていただきたいと思います。最近、「論座」という雑誌の6月号で、前にも引用させていただきましたけれども、「カリヤ」さんという東大の先生、先生グループと言った方がいいと思いますが、今の学習指導要領と82年くらいですか、いわゆる「ゆとり」などと言う以前の学習指

導要領を使っていたときの、子供たちの学力がどうなっているのかということと比較したものが、教科別にかなり詳しく書いてあるのです。

結論から言いますと、「ゆとり」あるいは新しい学力観と言われ出した最近と比べて、基礎学力が落ちてきているということが、我々素人が言うのではなくて、専門の教育学者が言うのですからそうかなと思います。

そんなふうに、親たちも、授業時間が少なくなるとか、総合学習という得体の知れない教科が入ってきて、その分、時間を確保しなければならないということになると、どこかにしわ寄せが行くとか、土曜日が休みになってしまうとか、そういう面での不安というものが大変あるわけです。

どなたかその雑誌を見て、何か感じたことがありますか。あるいは見ていませんか。いかがですか。

#### (学教) 指導室長

すべてを熟知しているわけではございませんが、学力の捉え方がまず問題になろうかと思えます。

基礎・基本の部分を確実に身につけながら、その基礎・基本をどこで使っていくのか。学力の定着と申しますのは、単に暗記だけではなしに、さまざま生活の場面で使ってこそ定着が図られると思えます。

その場面を、今回は総合的な学習の時間ということで設定しておりますので、教科学習の中で基礎・基本を確実に身につけ、それを基にして総合的な学習の時間の中で、あらゆるそういう学習を基にして、子供たちが思考力、判断力、表現力を身につけていくというのが今回のねらいでございますので、そういう意味では、総合的な学習の時間には期待しているところでございます。

#### 教育長

ただいまの「論座」の論文は、読ませていただきました。

今、東大あるいは六大学でも、高校の補修コースに理科、数学とかが設けられて、入学した大学生がその講座に参加している、そういう状況を見ますと、学力の総体的な低下は否めないのではないかと。

ただし、その学力という考え方は、1982年ごろの学力は知的学力で読解力とかいうことであって、今の学力は判断力、思考力、協力する能力なども含めての学力になってきております。

ですから、読解力の非常な低下ということがその論文の中で指摘されておまして、これは、日本語にかかわる問題であり国語力にかかわる問題なので、私も問題として理解しておりますが、当面、私どもは完全学校5日制の中での、いわゆる学校の取組に注目をいたしたい。

だから、そういう考え方というのは、学校における学力に対する反省点として、常に自覚していなければならないと思いますけれども、教育委員会の立場としては、例えば、父母が土曜日に補講をとっても、すぐ、それに乗るような形ではいかない。

やはり、教育政策とか教育のための条件整備、ということをまず念頭に置いて努力して、その上で、じっくりと子供たちの学力がどういふふうに変化していくのか、そういう調査、検討をまずしなければいけないのだ、現時点ではそう考えております。

#### 高階委員

今、教育長の答弁の中にも、これからその実態をよく調査していくというお話もありました。

スタートしたばかりなのですけれども、スタートした途端にいろいろなことが言われておりますので、小樽の新学期指導要領のもとで学校現場、生徒の実態がどうなのかということは、少し時間をかけて押さえるというか、調査してもらおうということを希望したいのですが、それはいかがでしょうか。

#### 教育長

先ほどもお答えいたしました、すぐというわけにはいきませんが、校長会、研究所、学校と相談しながら、子供の実態をどう捕まえていくか、どう考えているか、先生方の話も聞きたいですし、父母の意見もお聞きしたい、そう考えております。

**高階委員**

申しわけないのですが、もう一つあります。

低い回答率で先生にかかわるもの、生徒にかかわるもの、どちらでもいいのですけれども、これはアンケートですから、そのまま出たとは思いますが、不都合なものは省いてしまったのか。そんなことはないですね。

**(学教)京谷主幹**

アンケートですから、ある意味での集約はいたしましたけれども、そういった事実について、ご指摘のようなことは、私どもはしておりません。

**高階委員**

それは、よく聞いておきます。

**学校教育部長**

今の主幹の答弁に追加させていただきます。

今回のアンケート調査についてでございますが、先ほど主幹から説明申し上げましたように、短期間で考えまして、そして短期間で実施、集約、まとめたものでございまして、皆さんからご指摘をいただいた部分につきましては、教育長からも言っていますように、今後、特に現3年生につきましては、途中から学校を移ったものでございますので、再度、調査の中身をきめ細かく、特に、調査の内容については、いろいろな機関を通じまして十分検討しながら、また工夫して、その結果を踏まえながら考えていきたいと、私どもは考えています。

そういう意味で、今、高階委員からご指摘がありました。恐らく報道関係等で公表されるものですから、この中身について、質問項目を除いたりとかは決してございませぬので、そこところはご理解ください。

**高階委員**

新学習指導要領のことをお尋ねしたのは、いろいろなことをやる上で、まず、これが最優先ではないかなという気がするのです。

統廃合の問題もあるのかなんとかということはありません。

しかし、今、スタートしたこの問題は、全部の生徒にかかわる問題、全部の学校にかかわる問題ですから、同時並行という言い方もあるのでしょうかけれども、教育委員会としては、この問題については、しばらくは相当に本腰を入れて取り組むことが優先されるのではないかと、という趣旨でああいうお尋ねをしたのです。

**委員長**

共産党の質疑を終結いたしまして、次に、自民党に移します。

**横田委員**

**中学校適正配置実態調査について**

中学校の適配の実態調査が終わりまして、アンケートの結果が出されました。先ほどの質問で、教育委員会は大きな成果があったと思われるという部分で、共産党はそうでないというご質問でした。

しかし、我が党としましては、決して教育委員会を持ち上げるわけではありませんけれども、いろいろな面で、国旗・国歌、先般のＴＴ問題など、対立している部分が多いのですが、この適正配置に関しては非常に大きな事業だったと思います。3校を廃校し、3学年だけをやるという特殊な方法でやった事業で、全国にもあまり例がないのかなという気がします。

もちろん、3年生がいるわけですから、すべてが終わったわけではありません。ただ、大きな節目は終わったのかと思います。閉校式も終わりました。そうした中でこのアンケートが出まして、際立って、適正配置はとんでもなかったというようなご意見は、先生方からももちろんありませんし、生徒さんの方からもない。

例えば、適正配置が原因と思われるいじめはありましたか、というのは全くないです。不登校はありましたか、

というものない。こういったことで、もしあったということになると、適正配置はどうだったのか、ということになるのでしょうか。

もちろん、生徒にはいろいろな方がおりますし、先生もいろいろな考え方がありますから、すべて、そのアンケートがいい結果になるとは、もちろん思いませんが、おおむね、適正配置自体はよかったと言えると思います。

ただ、問題は回答率の関係です。対象校の先生方20名から回答をいただいた中でも、無回答というのでしょうか、答えられていない方が、2人、3人というふうにあるのが気になります。

これは、先ほど共産党から、適正配置がおもしろくなかったので回答しなかったのではないのか、というようなご質問もありましたけれども、私は、最高学府で教育を受けた先生方が、そんなことでアンケートに協力しないということはないと思います。

この無回答がそれぞれありますが、これはどうでしょうか、特定の方が無回答だったのでしょうか、それともばらつきがあったのか疑問に思いますので、この点はどうですか。

**(学教)京谷主幹**

せっかくお答えいただいた中で、設問によっては無回答の部分がございました。

そういった意味で、特に集中してこの設問に対して回答がなかったということではなくて、例えば、受入校の生徒理解というのは、たまたま異動で1年くらいしか子供たちを見ていないので、この設問に対して回答ができないとか、そういったことは答えないでおこうというのか、無回答という表示になったのではなかろうかと、私どもはそのような感じを受けております。

**横田委員**

特定の方が各問に全部答えないとすると、アンケートとしては異常な格好になるのかなと、それを心配しましたのでお尋ねいたしました。

**小学校適正配置の時期について**

先ほど、小学校の関係については、まだ作成中だというお答えでございました。

基本方針と実施方針は小中学校は一緒ですので、基本方針が11年6月に出ております。実施方針は11年8月、2か月後に出ております。その後、一部改正などがございました。

基本方針、実施方針はできているわけですから、この次は実施計画ですか。中学校の場合、実施計画に案がついた実施計画案というのが、年が明けて12年1月に出たのですね。この実施計画案はいつごろ出てくるのか。これについては、どの時期に出されるお考えなのか、お聞きしたいと思います。

**教育長**

私どもは、今、考えをまとめる段階まで至っていないのですが、先ほどもお答えいたしましたように、来年6月くらいの実施案というのは、まだ固まらないだろうと。固まっても、来年の秋ごろになるのではないかと私は考えております。

小学校は、中学校よりも若干規模が大きくなるでしょうから、それをどういうふうにするか、複数年でやろうとするのか、それとも一度にやった方がいいのか、そういう選択の問題もあります。現在言えるのは、そういうことを検討しなければいけないので、ちょっと時間がかかるなど、そういう予測を持っております。

しかし、来年に入りましたら、なるべく秋ごろを目処に、そういうものについて固めてみたいなど、これは私個人の感じ方です。部内ではまだ検討いたしておりません。

**横田委員**

秋くらいを目処ということですが、当然、中学校の場合を参考にしたいと思います。すべてではないでしょうけれども、踏襲するとか、同じような形をとられるのかなと思いますので、この後に、案がとれた実施計画が出るわけですね。この間、半年くらいかかっているわけですが、昨日の病院の委員会でも、市民の関心は病院の場所



で、どこにできるのかが関心だということでした。

学校の場合は、中学校もそうでしたが、どこの学校、校名が非常に関心のあるところといいたいでしょうか、最も重要な部分だと。この校名の出方といいたいでしょうか、中学校の場合、たしか案付きで出ましたね。それが実行されたということで、市民からも、びっくりした、あるいは寝耳に水みたいなお話があったわけです。

校名は、当然出さなければならぬわけですが、その校名が出るのはどの段階なのですか。案の段階なのか、案がとれて完全な実施計画で出てくるのか、あるいは、もっと違う手法でやるのか、その辺でお考えがありましたら、校名を出せというのではないのです。出し方をどのようにお考えになっているか、ということをお聞きしたい。

#### 教育長

今のところ、秋くらいまでに基本的な構想といえますか、考え方をまとめたいとしておりますが、中学校の反省の中で、地区、学校の父母の意見を十分に聞いてほしいと。

そのときに情報を丁寧に出して、その上で意見を聞いてほしいということがありますので、現在は、まだ対象の学校名を挙げるまでに至っておりません。28校が対象だということは、言えるのだと思います。

#### 横田委員

まさしくそのとおりで、うまい言い方があったなど。

もちろん、校名をすぐに出せという無理なことは言いませんが、出し方によっては、中学校のときのようになんかごたごたしますので、その辺は十分にお考えの上、校名を出す時期をご検討いただきたいと思います。

#### 小学校適正配置の手法について

最後に移行といいますが、統廃合のやり方、手法なのですが、小中学校の実施計画の一部改正が出ましたね。これは、学年進行から全学一斉に行うというようになっていきます。この一部改正は、小中学校になっているわけです。

小学校も入っているわけです。小樽市小中学校適正配置実施方針の一部改正です。適正配置は小学校及び中学校においては、全学年一斉に行うという一部改正が出たわけです。その後、実施計画で3年生が移行すると。

小学校の場合、この一部改正が生きるとすれば全学一斉で行うということなのですが、これにとらわれるといいたいでしょうか、そのまま生きているという考えでよろしいのですか。

#### 教育長

小学校は兄弟で登校しているという例もございますので、1年生から6年生まで一斉にやりたい、そういうふうにご考えております。

そして、その中で一番検討しなければいけないのは、1・2年生のいわゆる低学年の登校状況をどういうふうにご把握して、どういうふうにご具体的に登校させたらいいかと、そのご扱いが一番難しいだろうと思っておりますので、そういう技術的な面の検討とか、技術的な面の基本案の作成ということに時間がかかるだろうと思っております。

#### 委員長

それでは、自民党の質疑を終結いたしまして、市民クラブに移します。

---

#### 大島委員

#### 中学校適正配置実態調査について

資料1の説明をお聞きし、また、資料に基づき、アンケート内容の資料を再度提出していただきました。

アンケートの件については、前の質問とダブリますので避けますが、今までの議論を聞きますと時期が悪かった、多忙な時期だ、3月だと。

しかし、この資料を見ますと、同じ条件でありながら、80パーセントを超えている学校もある。Cですね。そうすると、同じ条件でありながら、このように回答している学校があるということは、やはり取組の態度で、資質の

問題があるのではないかと。この資料を見て、そのように思っております。

A、B、Cと出ておりますから、どこの学校かわかりませんが、資料1を見ますと、受入校の順番が書いてありますので、あるいは、この順番かなと憶測しているところでもあります。

このような状況で、私は、このアンケートというのは、次につながる大事な資料だと思うのですよ。そのことを、先生一人ひとりがもっと真剣に受けとめて、適正な回答をしていただきたい、そのように思っております。

子供たちは、92パーセントを超えているのです。そうすると、これは設問の内容にもよりますけれども、子供たちの考え方というのは、おおむね正しいのかな、当てにできるのかなと。

しかし、受入校については、私は、これは全く参考にはできないと思っております。全体においても61パーセントですか。30パーセントを割っているケースもある。これは、対象になりません。

先ほどの教育長答弁では、10月に再度アンケートをしたいと。そのような考えでございますけれども、このときには、100パーセントとはいかなくても、一人ひとりが真剣に取り組んだ態度を、数字で表してほしい。そのように望むものであります。新しく来られました学校教育部長は、どのようにお考えですか。どのように指導する考えなのか、お聞かせください。

#### 学校教育部長

アンケートに関しまして、特に教職員におきましては厳しいご指摘がございました。

私どもは、多忙な時期という説明をしておりましたが、今、委員がご指摘のように、高い率を上げた学校もあると、私ども教育委員会の指導不足ということも、じゅうぶん感じてございます。

今後、委員のご指摘のとおり、先生方も子供同様にアンケートに臨んでいただき、適正配置が本当によかったものである、または、その逆の意見をきちっと聞くアンケートにしたいと考えてございます。

#### 大島委員

アンケートについては、そのようにお願いをします。

#### 廃校後の管理について

廃校になりました石山、住吉中学校は、現在はどのような管理にしているのか、お聞かせください。

#### (学教)京谷主幹

今、2校につきましては、いわゆる外壁擁護と申しまして、簡単に中に入られないように塀を囲っています。また、1階の窓ガラスには、パネルなどを張るようにして、窓ガラスが壊されることのないようにしています。

#### 大島委員

巡回の管理は、行っているのですか。

#### (社教)施設課長

旧石山中学校、旧住吉中学校の巡回警備は、週3回ほど行っております。そのほかに、近隣の消防署の協力を得て見てもらうこともあります。そういう考えでしております。

#### 大島委員

お祭りのシーズンが始まるのです。6月9、10、11日ですか、たしか手宮祭りだと思います。祭りを通じて、いろいろな問題が発生するのが、この時期でございます。

かつては、その場所は浄應寺の境内でありました。しかし、今、遊ぶ者といいますが、そういう者にとっては無人の学校がすぐ近くにある。これは、週3回の巡回と言っておりますけれども、これからは毎日でもやっていただかなければ、非行発生のためり場になる危険性が十二分にあります。

私も、毎日あの坂を通ります。確かに、校門のところは板でふさいでありますけれども、上ろうと思えば幾らでも入ることができます。入ってしまえば全く人目のつかない場所になりますので、この点についても、十分な管理をしていただきたい。これは、住吉でも同じだと思います。そのようなことで、さらなる管理体制をしていただき

たいと要望いたします。

#### 小学校統廃合での特殊学級問題について

最後になりますけれども、資料2をいただきました。これを見ますと、先ほどの質問の中でも、小学校は今準備を進めていると。

今、この一覧表を見まして、括弧書きの特殊学級が数校にわたってあります。この学級も、場合によっては、統合になる可能性もあるかと思えます。

今、準備をしているということでございますので、お願いなのですが、中学校の適正配置の菁園中学校のようなことだけは、絶対に繰り返さないでいただきたい。これは、前にもこの委員会で質問しておりますけれども、現地を見て、説明を受けて、職員会議で決めたのだと。

しかし、それが果たして適正なのかということになれば、私は全く不適切だということで指摘をしました。なぜかといいますと、邪魔者扱いにしている傾向が見られる。

例えば、言うことを聞かなければ、それぞれ学級の名前があると思うのですが、そこに入れるぞと。今年、そういう訴えを聞いております。そのようなことがあります。大事に育ててください。そして、適正な場所に位置づけていただきたい。

準備中でありますので、そのことを十分ご配慮いただきたい。そのように要望して、質問を終わります。

#### 委員長

それでは、市民クラブの質疑を終結いたしまして、公明党に移します。

---

#### 斉藤（陽）委員

##### 中学校適正配置実態調査について

今、実態調査についての質問がありました。

我が党は、基本的に、適配そのものの趣旨というのは間違っていない。実際に、実施に伴って起こってくる問題点については、一つ一つを問題として、しっかりとらえて正しく解決する、そういう姿勢が大事だと考えます。問題自体を見ないようにするというか、そういうことでは問題の解決もないと考えます。これを前提として、調査そのものについての問題と、調査結果について、何点かお伺いさせていただきます。

まず、調査そのものですが、適正配置の本来の目的は、いわゆる小規模校の課題です。例えば、友人関係の変化が乏しくて人間関係が広がらないとか、学習面では、成績が固定化されて学習意欲や表現力に欠けると。

それから生活面では、仲間からの刺激が少なく社会性が育ちにくい。そういった課題があって、適正配置を行ってきたということになるわけです。

この適正配置そのものの評価についてですが、今の実態調査というのは評価すること自体とは別物だと、評価そのものは、改めて別に行うというふうに考えてよろしいですか。

#### （学教）京谷主幹

適配の目的と今回の実態調査との関係というご質問ですが、私どもは、ある程度、一定の作業が進んだ段階で、こうした調査をしたということになるわけです。

ただ、これが生徒全体の評価につながるものなのかどうかということにつきましては、先ほど来ご答弁申し上げているように、今後も引き続きこのアンケート調査を基に、今までの指摘も含めて対応が必要なのかなと、このように感じております。

#### 斉藤（陽）委員

改めて別に行うと考えてよろしいですか。

そこで、次に客観性ということなのですが、今回の実態調査の客観性について、先ほどから、他の委員からいろ

いろな指摘があるわけですが、今回の調査については、十分に客観性があるというふうに、教育委員会として考えられているかどうか、まず伺います。

(学教)京谷主幹

十分な客観性があるかというお尋ねでございますけれども、先ほど来申し上げているように、このアンケート調査がすべてではなかったと、不十分な点がある、設問の中身についてもそうだと、我々は反省しています。

それから、アンケート調査そのものが、全部、完全に客観性があるかということに對しましては、何度か、これから修正していかねばならない、見直していかねばならない部分というのは、あると思います。

斉藤(陽)委員

反省すべき点もあるということだと思っておりますが、私も十分ではない、客観性が十分あるとは、ちょっと考えられないという部分で二つあると思っております。

まず一つは、先ほど言いました人間関係の広がり、学習意欲、表現力、自主性、社会性、そういった概念なのですけれども、きちんと定義をして、そのものを調査したというわけではないのです。教職員あるいは生徒が持っているイメージを前提とした意識調査なのです。意識調査が必要ない、と言っているわけではありません。

意識調査の意味合いという有効性はあるわけですが、そういうものをもって、適正配置そのものの事業としての評価ということには、十分な客観性を持って判断することはできない、ということがまず一つあると思います。

それから、もう一つの大事な点は、先ほどからも出ているように、客観的な比較対象物がもう既になくなっている。どうやって比較するのだという物理的な問題が一つあると考えます。

この2点からして十分ではないのですけれども、今後、教育心理学あるいは発達心理学、そういったカテゴリーの中で、より客観的で専門的な調査というものが、きちっと行われなければならないのではないか、ということについてはいかがですか。

(学教)京谷主幹

先ほど来ご答弁申し上げているように、今後における調査、検証内容でございますけれども、ご指摘のようなことも含めて、一歩進んでより深めるように、専門的な、あらゆる面で今回のアンケート調査になかった項目も含めまして、これからの内容等について検討しまして、そういった方向に向かっていきたいと考えております。

斉藤(陽)委員

調査そのものの種類を別にしてもらいたい、ということを行っているわけです。

いわゆる意識調査、アンケートではなくて、もうちょっと科学的なといいますか、教育学あるいは教育心理学の根拠を持った調査をした方がいいのではないかと。

このことは、小学校の適正配置を行うときに、その実施前に、いわゆる人間関係の広がり、学習意欲、表現力とかそういったことについて、きちっと事前のデータをとっておいて実施して、それを実施後と比較する、そういうごく当然の論理的な手続だと思っております。

そういうことをきちっと行って問題点を把握した上で、適配そのものの内容、方法、それに伴って行わなければならない対応施策といいますか、補助指導員の配置とか、そういったことも前もって検討しておく必要があるのではないかとということなのですが、この点についていかがですか。

(学教)京谷主幹

そういった手順を踏みながら、次の小学校に向けてということにもなっていくのでしょうかけれども、そういう意味では、ご指摘の部分がすべて網羅できた対応ができるかどうかはわかりませんが、いずれにいたしましても、アンケート調査をやった結果を踏まえまして、やはり見直すところは見直して、ご指摘のようなことも受け入れてやっていかなくてはならないのかな、というように考えております。

**斉藤（陽）委員**

ここの部分というのは、今回の中学校の適正配置の総括といいますか、非常に大事な部分だと思うのです。

反省点として、小学校に無用な混乱といいますか、小学校の子供たちも大変な思いをして、適正配置ということを経過していかなければならないわけですから、その場に当たって、我々が最大限、最善の努力をして、こうやりましたというものを、きちっと示していく必要があると思うのです。

この点について、教育長はいかがですか。

**教育長**

今、対象校、受入校の調査を考えているのですけれども、14校のうちの、ちょうど半分だけがアンケートの対象で、残りの半分は陰の中に入ってしまったのです。

ですから、先ほどご質問がありましたように、いわゆる完全学校5日制で目指す学力とか、そういう面で教育心理学、あるいは学力論の立場でアンケートをやるのであれば、いわゆる適正配置対象校、受入校を除いて、全校を対象に、中学校が現在どういう時点にいるのかという視点の方に座を移してはどうかと、ご質問をお聞きしながら考えておりました。

今後、部内でよく検討させまして、その対応についてお答えしてまいりたい、そう思います。

**斉藤（陽）委員**

私も言外にといいますか、暗にそういうことを希望しながら話をしていたわけですが、ぜひ、そのようにお願いしたいと思います。

何人かの委員の方からも出ていたのですが、今回、校長先生、教職員の回答が非常に少なかったという部分については、意義が理解されていなかったのかなという気がしますので、そういった部分は今後注意して、意義をしっかりと理解していただいて、調査を実施するというをお願いしたいと思います。

調査結果の中身なのですけれども、2点ほど簡単に伺いたいと思います。

まず一つは、受入校の方についてだけ伺いますけれども、受入校の生徒の部分で学習意欲が低下したと。先ほども出ていましたけれども、学習意欲が低下したという答えが、95人中19、20人という相当な高率であるわけです。

これがまとめの表現では、少数ではあるがそういう生徒もいたという表現になっているのです。これについては、少数というとらえ方はちょっとできないのではないかと。

95人中19、20人というのは、相当多いと見るべきではないのかという気がするのですが、この点はいかがですか。

**（学教）京谷主幹**

率を人数に換算して何人中何人というようなことでは、確かに、見方によっては少数ではなくて、ある程度含めているというようなご指摘だと思います。

私どもも、確かに、そういう数字を基に文章化した面もありまして、すべて集計結果を文章に一言で表すというのは、なかなか難しい面もございます。そういった面では、とり方によっては少数ではなくて、もっと多いのではないかとこのふうにご指摘であれば、そのように感じざるを得ないと感じます。

**斉藤（陽）委員**

先ほどもありましたけれども、時期的なものです。当初、転校してなかなか馴染めないといいますか、進度、教科の方向の違いということで戸惑いがある、そういうものを引きずっている、なかなか意欲を持ってなかった、そういうことも考えられるわけです。

そうだとすれば、ある程度の時間をかけて、しっかり指導すれば解決できることだと思うのですが、その点についてのお考えはいかがでしょう。

**（学教）京谷主幹**

確かにご指摘のとおりで、もう少し時間をかけて、じっくりと生徒の分の評価、見方、そういったものに時間を

かけながら一つの結論を出していくというのは、これは当然のことだと思います。今回は、たまたま短期間でやったところもございました。

**斉藤（陽）委員**

今度は受入校の教職員で、きめ細かな生徒理解が難しくなったというのが45人中3分の1の15人、33パーセントです。これは、まとめの表現でいきますと、「との回答もあった」という表現になっているのです。

「との回答もあった」といって、3分の1がきめ細かな生徒理解が難しいということでは、大変な問題ではないのかと、そういうとらえ方をすべきことだと思うのです。

「いずれにせよ、生徒指導補助員の配置等の効果も見られ、大きな問題は生じていない。」という表現は、数字を見て納得できるものではないと思うのですけれども、いかがでしょうか。

**（学教）京谷主幹**

確かにご指摘のとおり、事実、そういう実態があった中で、我々は本当にこれに蓋をしておこうという気持ちは持ってございませんけれども、受け止め方としましては、先生方がそう感じていたということで、実態がそうなっていますので、先ほど来申し上げているように、次回の調査からは、その辺も含めまして慎重に調査をしたいと考えております。

**斉藤（陽）委員**

「個別指導がしにくくなった。」は45人中の18パーセントで8人、少数なのですけれども、少数と言えるのかという問題が同じくあります。

適正配置を行ったということは、生徒数、学級数も増えているわけですよ。当然、活気が出て切磋琢磨ができて、学校全体に活力ができた。我々は、それを目指していたわけですから、適正配置はそういう大きな効果があった、意味があったわけです。

けれども、当然のことながら、生徒数が増えているわけですから、生徒理解、個別指導の面で教職員に負荷がかかる、大きくなるというのは、当たり前のことなのです。その当然のことを過小評価というか、表現を弱めるみたいなそういう表現にすること自体が、問題をしっかりとらえていないのではないのか。

しっかり問題を見て、適配を行って、学校に活力が高まったけれども、反面として当然出てくることなのだ。

ですから生徒補助員の配置、あるいはT Tとか、そういう少人数指導を取り入れながら、そういった問題を解決すると。我々も、そうしなければならぬという話ではないかと思うのです。その問題を、いかにも問題がないですよといわんばかりの表現にするとすることは、ちょっといただけないなと。

これを、我々が目をつぶってわからない顔をしてそのまま通すというのは、ちょっと許せないという思いがしたものですから、一言、言っておきたい部分なのですけれども、いかがですか。

**教育長**

非常に鋭いご指摘だったのですが、分析の資料1の2ページの左側、対象校の生徒の問題で、私どもが一番心配したのは、第3学年のいわゆる進路の問題でありました。

ここに書かれておりますように、全日制公立高等学校の合格者が増加したということで、本当に安心したのです。

同じように、受入校の大きな問題は、3ページの(2)の教職員の4行目にございます、「対象校における評価方法など」ということで、当時は相対評価で、5、4、3、2、1はある程度数が決まっていて、多くの学校から生徒が入ってきた場合、個々の学校の評価方法が違うものですから、それを一致させるという面で非常に苦労があって、生徒自体の苦労よりも教職員の苦労が非常に大きかった。そこで、生徒理解が難しいとか、あるいは、評価の方法で矛盾を感じているという面がありました。

今年になって、評価が相対評価から絶対評価にまた変わりましたので、今度は、第3学年の進路指導にもう一つ困難性が加わるので、これは受入校の最大の問題点である、そういうご指摘をいただいた、今後、学校と対応して

まいりたい、そういうふうに思います。

**斉藤（陽）委員**

この問題というのは、適正配置そのものの本質的な問題だと。部分的に、一時的に起きてきているとか、そういうことではなくて、適正配置を行っていく以上、我々は、常に考えていかなければならないことだと思いますので、セットできちっと対応をとっていただきたいというふうに思います。

**教育委員会庁舎の利用について**

調査についてはこれで終わりました、先ほど教育委員会の平面図のご説明をいただきました。1階の大会議室、小会議室、3階については資料室、資料保管室以外のいろいろな部屋を、一般利用できるというご説明でした。どういう形の利用ということを考えているのか。

**（学教）総務課長**

現時点におきましては、教育関係団体等から要請があれば、日程調整をしながら、執務時間中ですが、そういう中で利用できる団体の方は、どうぞ使っていただきたいということで、なるべく有効利用を考えております。

**斉藤（陽）委員**

いろいろな町内会だとか、個人、団体、そういったところで使用できるわけですか。

**（学教）総務課長**

今のところ、まだでき上がっておりませんので、具体的な申出がないのですが、使う場所、会議室は、容量の問題がございますので、全部をお受けできるかどうかというのはわからない部分があります。

その内容をお聞きしまして、使えるところについては、時間、面積の制約はありますけれども、そういう中で利用できるところは、なるべく利用していただきたいと思います。

**斉藤（陽）委員**

もう少し煮詰めてということもあると思うのですが、昼もそうですが、夜も利用させることでいいのですか。

**（学教）総務課長**

昼の部分はOKなのですけれども、夜の部分につきましては庁舎管理の問題がございますので、今のところは考えてございません。

**斉藤（陽）委員**

あと、一般利用させるということですが、いわゆる備品管理だとかそういった部分で、例えばマイクなどの関係は、どういうふうになっていますか。

**（学教）総務課長**

今まで教室だったところがございますので、特に、今回は、そういうマイク設備のようなものはついておりませんが、黒板だけはありまして利用できる状況になっております。一番大きくても教室二つ分ですから、マイク設備が必要とするほどの状況ではないというふうに考えております。

**斉藤（陽）委員**

あと、一般に利用させて会議をしてもいいということであれば、会議の内容とか、防音壁というのですか、プライバシーだとか、そういった部分についてはどうなのでしょう。

**（学教）総務課長**

幸い、ここの事務室スペースは、1階の社会教育部関係と3階部分が開放スペースになっていまして、事務室部分とは、なるべく切り離れた利用ができるように考えてまして、音が出るものであれば、音楽室を利用いただければ、防音の形になっておりますので、そういうふうに思っております。

**斉藤（陽）委員**

**土曜日の施設利用等について**

直接、適正配置とかわからないのですけれども、1点だけ伺いたいのです。

先日、我が党で、教育問題について、広く教員の方と懇談をさせていただきました。その中で、今、議論になっているような新指導要領の問題点だとか、学校週5日制ですとか、国旗・国歌の考え方について、また、学校施設に関する問題ということで、施設の雨漏りだとか、そういう指摘もありました。

その中で1点だけ、今5日制になりまして、土曜日は子供が遊ぶといいますが、学習すると言ってもいいのですが、休みの土曜日に行く場所がないということを先生方から言われたのです。

社会教育の方では子どもセンターですか、インターネットでも周知しておりますし、そういうものがあるのですが、学校で校長先生あるいは直接の教職員の先生方が、そういった部分をよく承知されていないのかなと。

教育委員会としては一生懸命やっていますが、実際の学校現場の先生方がそれを知らないというか、そういった部分もあるのかなと、ちょっと気になったものですから、その点、学校の方はいかがですか。

#### (学教) 指導室長

学校開放につきましては、昨年度まで2、4週目の体育館、図書室が開放されておりまして、今年度から全土曜日が開放される、そういうことでの案内は先生方を通じて、生徒には周知ができています。

それから社会教育でさまざまなプランが計画されておりますが、そのプランも、担任の手を通じて、生徒たちには周知されているように思います。

#### 斉藤(陽)委員

教育委員会は、そうおっしゃると思うのですが、実際の現場の先生方は、「そうなのですか。」と、逆に我々に聞く場面もあったのです。

ですから、実際に先生方から子供たちに、こういう場所、イベント、体験をやっていますとかいうことをもっと周知する、学校の努力が必要ではないかという気がするのですが、いかがでしょうか。

#### (学教) 指導室長

ただいまのご指摘を受けまして、校長会を通じて指導してまいりたいと思います。

#### 委員長

公明党の質疑を終結いたしまして、民主党・市民連合に移します。

---

#### 渡部委員

##### 今後の適正配置の取組について

今年3月で対象校の3年生が卒業して、昨年からの実施で今回3年生も卒業したということで、当初、この適正配置、あるいは学校における統廃合というのは、非常に難しい問題であると、理事者との話なり、あるいはほかとのかかわりで、いろいろな角度から話をし、むしろ、学校の適正配置よりも病院の方が先に進むのではないかと、それくらい難しいという当初の指摘がたくさんございました。

しかし、教育委員会、それから関係理事者、議会も、本当に一生懸命に審議をし、父母、PTA、町会関係者に説明するなりして実施に入っていたということから、今回、アンケートの実施ということになりました。

アンケートに関する面での質問がございました。私は、これは一つの検証として1回目の取組であって、いろいろ指摘を受けることは、たくさんあるだろうと思います。

まず、大事に見ていかなければならないのは、適正配置を進めていく上において、趣旨、目的といった面からしていくなれば、向上、活力、時には活性化、触合い、はぐくみ、交流、意欲、切磋琢磨、同時に学校環境整備の問題も、趣旨や目的の中でずっと話をされてきました。

ですから、今回、アンケートの中で、特に一番最後の10ページの転校・在校生に対する調査結果といった面から見て、やはり不安なところとか、あるいは少なくなった、低下した、そういう面は、きめ細かにどう対応していく



のかが大事であろうと。

つまり、前の学校で取り組んできた創意工夫、あるいは主体性、独自性ということもそうですけれども、そういったものが移ったことによって、何もなかったのか、あるいは、あったのだが形が変わっていたのかとか、そういうような面で、少なくともこういうふうには回答されている面については、今後においても、きめ細かな対応ということと同時に、お話しいたしましたように、最初から趣旨、目的に向けて議論して、そこで目指すものということについては、それを目指していくということに邁進していただきたい、というふうには私は思います。

同時に、いろいろと関係者に説明してきました。

関係者に説明してきた、父母の皆さん、PTA、町会、関係者はどのように見ているのかということも、ちょっと知りたいという部分もあり、またそういうふうにも見ておりますので、この次にまた機会があるようでしたら、そういった面も、アンケートでないにしても、調査いただけるものだったら調査をしてほしい。その上で、教育委員会としての、一定のまとめた面も出していただければと考えております。この点でいかがでしょうか。

それから、先ほどお話しいたしましたように、この学校における適正配置だとか統廃合というのは、やっぱり非常に難しい問題だと。全国的に、市議会などでも注目をするという、一つの項目にも実はあるわけです。

とんとんで進んだところもあるし、なかなか進まなかったというところも実はあります。

私は勉強不足で申し訳ありませんが、小樽市議会に、例えば適正配置等でどのように取り組んだのでしょうかという視察があったのかどうか、全く承知しておりません。

それだけ難しい問題であるということは、しっかりと受けとめて、今後においても対応していただきたい。そのことをお願いするわけですけれども、いかがなものでしょうか。

**(学教) 京谷主幹**

最初の今後の取組について、ということでございます。

先ほど来申し上げますように、この検討結果を主体に、マイナス面、ご指摘の面というところで、改善策を含めた対応は、当然のことながら、必要ではなからうかなというふうには考えております。

そういった中で、今回、調査をしていなかったPTA、町会、その他関係者、そういった方々の意見、見方を徴するということにつきましても、今後、部内で検討して、どういう方法がいいのかと。私どもも、そういった面からの意見も必要なのかな、ということは考えてございます。

そういった意味で、引き続き、掘り下げて対応していかなければならないと考えております。

それから、2点目に、やはり全国的に注目される中で、議員視察等では、中学校適正配置の説明をお願いしたいと、議会事務局から頼まれまして、遠いところは九州、それから、埼玉、兵庫など4カ所くらい来ていました。

そして、中学校の適正配置について注目するところは、やはり短期間のうちに進められた状況で、ノウハウとは申しませんが、そういったところは、どういうふうに進められたのか、あるいは、地域に入ったときの状態、状況、それから、生徒、教師に対する対応はどうであったのか、というようなことで、非常に注目されている中でご質問を受けた記憶があります。

そういった中で、今、委員からご指摘がありましたけれども、児童・生徒の理解はもとより、町内会、学校など多くの方々の理解を得ながら進めさせていただいて、思いのほかとよいまいしょうか、そういう意味ではないですが、そういったことで、結果は非常にスムーズに適配が実施されたと、お話を申し上げます。

**教育長**

道内から、私どもの方に、適正配置のあり方、苦しい点、進め方という問い合わせですけれども、函館、釧路、室蘭といったような、港を擁する都市が小樽にやってきております。

そのほかでは、札幌市は、小学校4校を1校にすることを考えているようです。

そういう形でやっています、という点が一番つらいのか、財政的な面でどういう工夫が必要なのか、あるい

は通学の問題とか、個別の問題で、いろいろ問い合わせがございました。

今、主幹が言いましたように、3年間という期間で実施をしたということは、驚異であるというお話がありまして、私どもは、ちょっと自戒しなければいけないかなと、そういうふうにも感じております。

**渡部委員**

小樽市内の関係者を含めて、議会も十分に審議をして、ということで取り組んできました。

それから、注目されるという多くの面もありますから、当初の目的、趣旨に基づいて、本物であるというものに向けて、今後においても一生懸命に努力していただきたい、ということをお願いして終わります。

**委員長**

民主党・市民連合の、質疑を終結いたします。以上をもって質疑を終結し、本日は散会いたします。